

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20820008  
 研究課題名（和文） 現代言語芸術におけるイメージの諸問題とその批評方法の探究 シュルレアリスムの場合  
 研究課題名（英文） The Problems of the Image in the Modern Language Art Case of Surrealism  
 研究代表者  
 齊藤 哲也（SAITO TETSUYA）  
 山形大学・人文学部・講師  
 研究者番号：10507619

研究成果の概要（和文）：フランスの文学・美術運動であるシュルレアリスムに参加した作家、芸術家に焦点をあてながら、言語作品と造形作品とのあいだに存在する重層的な関係を考察した。

研究成果の概要（英文）：This study focus on the writers and the artists who participated in the “Surrealism”, French literature and art movement, in order to considerer the relations between language works and plastic works.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,320,000	396,000	1,716,000
2009 年度	1,190,000	357,000	1,547,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,510,000	753,000	3,263,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：シュルレアリス、イメージ、現代美術、映画、ヴィジュアル

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、二十世紀フランスを中心にして起こった文学・芸術運動シュルレアリスムの作家たち、おもにその運動の中心となる人物 アンドレ・ブルトン（1896-1966）の作品を考察の中心として、現代言語芸術についての研究を進めてきた。

しばしば「前衛」という肩書きとともに語られてきたシュルレアリスムであるが、特に1980年代以降、このような一面的な評価にとらわれない研究が登場しはじめ、比較的近年、全四巻で完結したプレイヤード版「アンド

レ・ブルトン全集」の例にも明らかなように、国内外を問わず近年ますます注目の集まる研究対象である。

研究代表者はこれまで「引用」という、従来の批評においては傍系的なものととらえられてきた活動を、逆に文学の中心問題として位置づけることで、現代の言語芸術に固有な問題を語りうるための新しい読解モデルの構築に努めてきた（この研究は学術振興会の特別研究員奨励費の助成を得た）。

上記で研究でえられたパースペクティブを言語と映像が複雑に干渉しあう多層的な

領域に移行させ、従来の言語学的なモデルには限定されない現代に固有な表象の諸相を分析し、それを語りうるための批評方法の確立を目指すことが本研究の出発点となった。

## 2. 研究の目的

本研究では、言語と映像が複雑に干渉しあう多層的な領域を対象とすることで、従来の文学・言語学的な研究モデルにおいては考察の外におかれてきた、複数の表象間に提起される問題の解明を目指した。分析の対象が徒に拡散しないよう注意し、そして、何よりも得られた成果を研究業績として発表することを重視して、本研究では、二十世紀初頭、フランスを中心に独自の展開を遂げた文学・芸術運動であるシュルレアリスムに焦点を当てながら、上記の計画を遂行していくことにした。

二年間という研究期間にあわせて、本研究ではおもに、以下の2つの角度から考察を進めていくことにした。

### (1) イメージをまえにした言語

可視的な対象を、言語という象徴的なコードに基づいた記号によって写し=移しとろうとする試みはこれまで数多く存在したし、実際「描写」という問題系はこれまでの文学研究においてひとつのトポスを形成してきもした。だが、言語のなかにそれとは異質な「可視性」のレベルが導入されようとするとき、そこではいったいどのようねじれが生じているのだろうか。

シュルレアリスムの試みがそれまでの伝統的な美術批評と大きく異なるのは、描かれるべき対象に対する言語の透明さという素朴な認識とははっきりと決別する地点に立ちながら、それでも(おそらくそれだからこそいっそう)イメージの問題に立ち向かうことで言語を練磨し、飛び越えがたいこの表象間の闘いにおいて言語活動の可能性と不可能性を見極めようとした点である。

したがってそこでは、描かれる対象や内容というよりも、<描くこと>それ自体、つまり自己のうちにエネルギーを内包した言表行為それ自体の複雑な様態が分析対象とされなければならないはずだが、従来の「描写」の問題系を逸脱するこの複雑な言語の様態を記述するための方法をいまだに文学批評は見出していない。

本研究では特に、シュルレアリスムの作家の美術に関するテキスト群を具体的な考察の場としながら、イメージをまえにしたときの言表行為の複雑な様態を分析し、それを従来の美術批評や小説における描写の問題ともリンクさせながら、そこに潜む読みの硬化と停滞の危険性をあわせて指摘することを

目指した。

### (2) 言語をまえにしたイメージ

シュルレアリスムの言語行為が範例的なモデルを見出したのは言語活動内部であるよりも、絵画や写真といった映像の領域であった。たとえば「自動記述」と呼ばれるシュルレアリスムの根幹に位置づけられる言語活動に関しても、それは出発の当初から写真的なモデルによって定義されていたことはよく知られている。

したがって、これまで行われてきたように、シュルレアリスムの美術を従来の言語的なモデルに還元する作業は不十分と言わざるをえず、逆にこれからの研究に求められる態度は、イメージの具体的な分析から出発し、そしてそれに固有な問題系を正確に抽出した上で、言語活動の問題に再度立ち戻り、そして場合によってはそれらを相対化していく作業となるはずである。イメージは私たちに語りかける だが何をどのように語りかけるのであろうか。シュルレアリスムにおいてイメージはある種の「言語活動」とみなされるが、問われなければならないのはあくまでイメージによるイメージとしての<知>、つまりイメージにおいて、イメージとして、それ自身によって支えられる特殊な「言表行為」の可能性であり、それを語るためにはシュルレアリスムの美術に固有な、イメージの現象学が明らかにされなくてはならない。

本研究ではおもにシュルレアリスムの造形作品を具体的な考察の場としながら、独自の「言語」の発明をめぐって展開されるシュルレアリスムのイメージの問題の解明を目指した。

\*

近年、言語芸術や造形芸術の領域で提出される具体的な対象にあくまで寄り添いつつ、それら個別のかつ詳細な読解・分析作業を通じて、これまで反復されてきた「正統的」な思想史や美術史全体の読み直しを迫る刺激的な研究が多数発表されている。

近年の人文諸科学が見出しつつあるのは、言語とイメージが交錯する複雑な研究領域であり、このような問題意識のなかでシュルレアリスムという異質な要素によって織り成された研究対象は、現在の批評に課された問いを具体的事例として考察するための特権的な範例として、ますますその重要性を開示することになる。だがシュルレアリスムを対象とした研究領域において、この問題を具体的に扱うためのアプローチや、それを実際に分析に移すための批評言語はいまだ確立されていなかった。例えば比較的最近フラン

スで、シュルレアリスムにおける美術批評の問題を扱った研究が発表されたが、残念ながらここでも従来の主題論的な批評方法は踏襲されたままであり、この運動を「言語」と「映像」という境界において多角的に扱おうとするアプローチはいまだに見出されていないというのが現状である。

このような背景をふまえつつ、シュルレアリスムを具体的対象とした本研究が一定の成果を上げるなら、従来前提されてきた内容・形式といった作品受容とは異質な、言語やイメージの「効果」を語りうる新しい分析モデルをこれからの人文科学研究に提起することができるに違いない。このような展望から本研究は出発した。

### 3. 研究の方法

(1) まずシュルレアリスムの美術論を構成している膨大なコーパスを文献学的に整理し、それらのデータベースを作成するという基礎作業から出発した。

それと同時にいわゆる原典研究とは異質なところでシュルレアリスムのイメージ論を動機付けている力学や戦略を理論的著作を参照しながら考察していった。シュルレアリスムのコーパスを構成する作家として André Breton, Louis Aragon, Benjamin Péret, Robert Desnos, Antonin Artaud といった、これまで十分に研究が進められてこなかった作家たちをふくむテキストを、年代やジャンルごとに整理・分類して、そこで語られている対象との連関も考慮に入れつつ、シュルレアリスムに内在するイメージ論の問題をその独自性とともにも明確化することを目指した。

(2) シュルレアリスム全体に関する研究はやはり運動の発祥地であるフランスが中心となっているが、シュルレアリスム美術という近年見出されつつある問題領域においては、現在アメリカの研究者たちからつぎつぎと刺激的な論考が提出され、この分野の研究の中心はいまやアメリカではないかと思わせるほどである。ヨーロッパとアメリカの文学・美術批評の背後にある理論的前提の差異に十分注意を払いながら、シュルレアリスムにおけるイメージ論の射程をその受容の問題点とともに明らかにすることを目指した。

(3) さらに、おもに美術作品をコーパスとしながらシュルレアリスムの造形作品に固有な「言表行為」を語るための批評方法確立を目指した。研究対象があまりに拡散してしまわぬよう注意して、製作の問題とその批評の問題が複雑に絡み合った幾人の画家＝批評家の作品に対象を絞りながらシュルレアリスムにおけるイメージの問題を多角的に

考えていった。特に問題となったのは Max Ernst, Salvador Dali, Wolfgang Paalen, Marcel Duchamp, Joan Miro, Roberto Matta Echaurren といった画家、あるいは Man Ray, Raoul Ubac といった写真家の作品とそれをめぐるテキスト郡である。

### 4. 研究成果

本研究では、言語と映像が複雑に干渉しあう多層的な領域を対象とすることで、従来の文学・言語学的な研究モデルにおいては考察の外におかれてきた、複数の表象間に提起される問題の解明を目指した。上に記した研究を、4本の研究論文、3本の口頭報告として発表し、とくにヴィクトル・ブローネルという個別のケースを中心にして研究全体をまとめあげ、ひとつの単著として出版した。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

齊藤哲也「ブルトンとサド」、『層 映像と表現』第三号、ゆまに書房、2010年、24-47ページ(査読有り)。

齊藤哲也「窓/壁/輪郭 シュルレアリスム、あるいは「時宜をえない」もの」、『水声通信』第27号、2008年、23-35ページ(査読無し)。

齊藤哲也「シュルレアリスムの映画的条件 あるいは映画ならざるもの」、『層 映像と表現』第二号、ゆまに書房、2008年、37-58ページ(査読有り)。

齊藤哲也「絵画を分壊する マッタとブローネルのあいだで：《インターヴィジョン》」、『水声通信』第25号、水声社、2008年、128-137ページ(査読無し)。

〔学会発表〕(計3件)

齊藤哲也「声、テキスト、リズム」、『日本フランス語フランス文学会東北支部会、ワークショップ「声とテキスト」、山形大学、2009年11月28日。

齊藤哲也「シュルレアリスムと戦争」、『シンポジウム「民衆の政治と危機の速度」、北海道大学、2009年11月14日。

齊藤哲也「壁・窓・輪郭 シュルレアリスム絵画の空間」、『シンポジウム「シュルレアリスムの視覚体験とは何か」、早稲田大学、2008年10月24日。

〔図書〕(計1件)

齊藤哲也『ヴィクトル・ブローネル 燐光するイメージ』水声社、2009年。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

齊藤 哲也 (SAITO TETSUYA)  
山形大学・人文学部・講師

研究者番号：10507619

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：